

第3章 情報面での安全な避難所（高知県大川村の事例）

1. 大川村の概要

高知県大川村は、高知県の最北端（早明浦ダムの上流部）に位置する人口420人(H26.12.1)、面積95.28km²の村である。わが国の中で島嶼部以外では最も人口が少ない。山地が大部分を占め、極限られた平地に人々は暮らしている。

災害から身を守るための比較的安全な場所は乏しい。特に台風や大雨による土砂災害のリスクが高く、昭和50年、51年など過去たびたび災害を経験している。近年では、平成16年8月に2時間雨量205mmの豪雨が降り、村内各所で土石流やがけ崩れが発生した。その際、道路が途絶し、一時孤立状態になった。自然教育センターに宿泊していた村外の児童ら160人も孤立状態のまま一晩を過ごし、翌日ヘリコプターで救助された。人命の損失はなかったが、これは住民総参加の防災訓練を実施した直後の出来事で意識が高まっており、早めの自主的な避難が行われたことによる部分が大きいと指摘されている。

村職員数は21名と極めて少ない。マンパワーが極めて限られる厳しい条件下での災害対応となっている。

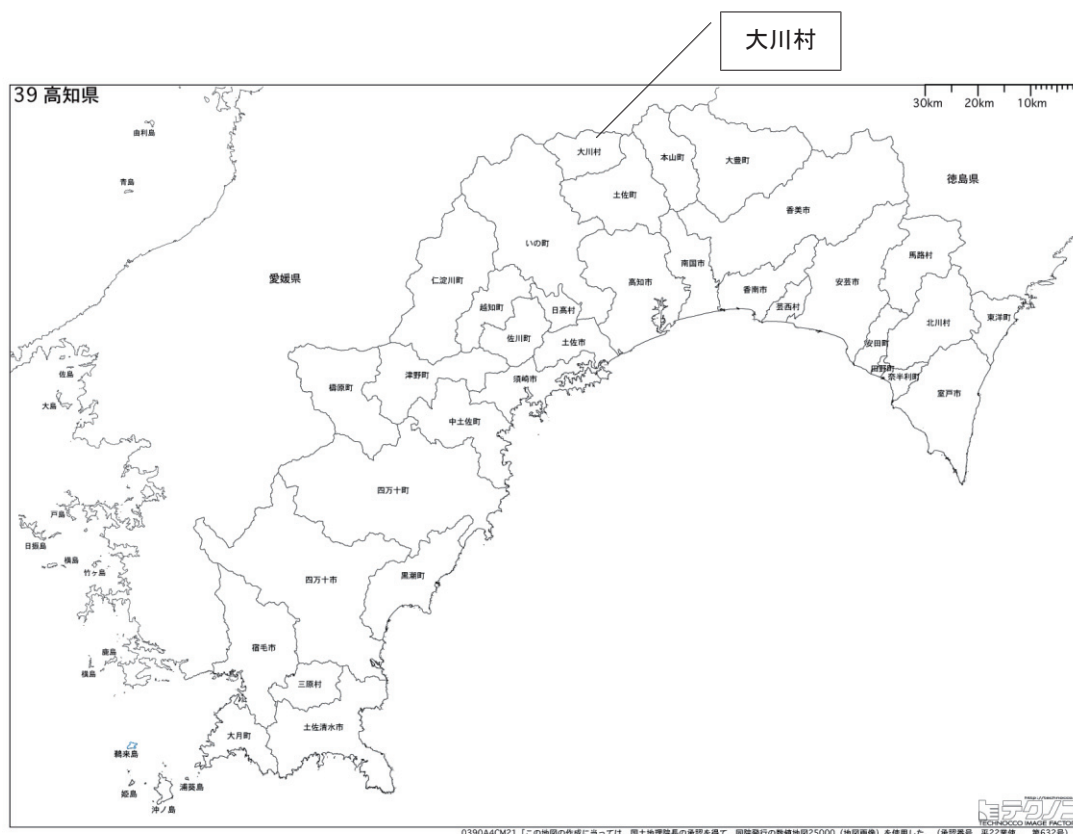


図1 大川村の位置

（出典）テクノコ白地図イラスト：<http://technocco.jp/>

2. 避難体制の特徴

（1）避難所の集約と早めの意思決定

災害リスクが高い一方でマンパワーや安全な場所が限られているといったことから、近年、避難所を1か所（大川小学校）に集約した。以前は、村内の各地域に4か所を指定していたが、職員を配置する